

13. 訪問看護ステーションにおける男性看護師の経験

上原文恵（信州大学医学部保健学科）、横山芳子、春日仁子（松本短期大学看護学科）

キーワード：男性、訪問看護師、経験

要旨：男性訪問看護師の経験を明らかにすることを目的に半構成的面接による調査を行った。逐語録を帰納的に分析した結果、大カテゴリーとして【困った経験はない】【関係性の築きやすさ】【利用者・スタッフから頼りにされる】など8個が抽出された。対象者である男性訪問看護師の経験が明らかになった。男性看護師ならではの利点も多いことから、男性看護師が訪問看護ステーションで働くことは、利用者への看護提供の充実にもつながると考えられる。今後、就業者数が増え、働きやすい職場を構築するためにも、医療・福祉の現場で、広く周知してもらうなどの認知度を高める取り組みが必要である。

A. 目的

高齢社会を迎え在宅医療を支える訪問看護の拡充は重要である。平成24年末の看護師に占める男性看護師就業者数の割合は6.0%になった^{1) 2)}。しかし、男性訪問看護師就業者数は、全男性看護師のうち0.83%と²⁾、1%にも満たない状況である。男性看護師の経験についての先行研究では、一般病棟の看護師を対象とした報告はみられるが、訪問看護師を対象とした報告はみられなかった。そこで、本研究は、未だ就業者数が少ない男性訪問看護師の経験を明らかにすることを目的とした。

B. 方法

1. 研究デザイン

半構成的面接による質的研究

2. 対象者

研究者が出会った男性訪問看護師から、ネットワーク標本抽出法にて紹介された関東・東海・甲信地域8か所の訪問看護ステーションのうち、精神看護専門のステーション2か所を除いた6か所に勤務している男性訪問看護師10名を対象とした。

なお、ネットワーク標本抽出法とは、社会的なネットワークを組む人々には共通の特性をもつ傾向があるという事実を利用し、少数の人のネットワークを利用して研究参加者を見つけていく方法である³⁾。

3. 調査方法

半構成的面接を30～60分程度実施した。面接は、プライバシーが確保できる環境で行い、対象者の承諾を得てICレコーダーへの録音とノートへの記録を行った。

4. 調査期間

2014年12月～2015年3月

5. 調査内容

対象者の属性は、年齢・看護職経験年数・訪問看護経験年数の3項目とし、面接内容は、訪問看護の現場で、1) 男性であることで困ったこと、2) 男性であることで良かったこと、3) 男性看護師が働くこと

義の3項目とした。

6. 分析方法

面接内容をもとに逐語録を作成し、何度も読み返し、意味の近いものをまとめ、[小カテゴリー]と命名した。小カテゴリーの共通性のあるものを集め、『中カテゴリー』と命名した。同様に中カテゴリーの共通性のあるものを集め、【大カテゴリー】と命名した。

妥当性は分析過程を研究者間で繰り返し検討した。

7. 倫理的配慮

対象者に研究の目的、調査参加の任意性、個人情報保持、不参加による不利益が生じないこと、研究終了後のデータの消去、研究結果の公表について文書と口頭で説明し、同意書にて同意を得た。なお本研究は松本短期大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

C. 結果

1. 属性

対象者の平均年齢30.6±7.4歳、看護職平均経験年数7.3±4.4年、訪問看護平均経験年数は2.9±2.4年であった。

2. 男性訪問看護師の経験

訪問看護ステーションにおける男性看護師の経験について、分析の結果、【大カテゴリー】は【困った経験はない】【関係性の築きやすさ】【利用者・スタッフから頼りにされる】【利用者の思いを配慮したケア】【少数派としての孤立】【男性の視点をケアに反映】【記憶に残る存在】【仕事が円滑に進む存在】の8個が抽出された。

1) 【困った経験はない】

〔新規契約時にはケアマネージャーが男性看護師の訪問の許可を得ている〕事前の配慮がされていた。また、〔女性限定という利用者の依頼があるときは最初から行かない〕という利用者の希望を確実に把握しながら『ジェンダーを考慮した事前の対応』がされていた。

2) 【関係性の築きやすさ】

男性利用者との関わりで、同性だから理解し合える

話ができる」と語り、『同性利用者からの支持』を表出していた。また、男性であることが、男女の両方の利用者にとって、『気持ちを伝えやすい存在』であることを表出していた。

3) 【利用者・スタッフから頼りにされる】

男性訪問看護師は、利用者とスタッフから、移乗などの力仕事を期待され、感謝されていると語り、『体力面の強さ』を表出していた。また、『夜間・緊急時の対応のしやすさ』と利用者・利用者家族から『頼りになる存在』であることを表出していた。

4) 【利用者の思いを配慮したケア】

男性看護師が良いという利用者、または、女性看護師が良いという利用者への対応、女性の排泄ケア等で男性看護師を拒否した場合、女性看護師と交代できるといった『利用者の思いを配慮したケア』を表出していた。

5) 【少数派としての孤立】

「職場が女性ばかりだと、その輪にあまり入れない」といった『少数派としての孤立』を表出していた。

6) 【男性の視点をケアに反映】

「生活で女性看護師には見えない部分が見える」[地域包括ケア会議の代表者には女性が多いため、男性の視点で意見が言える]といった『男性の視点をケアに反映』できることを表出していた。

7) 【記憶に残る存在】

「利用者に顔を覚えてもらえる」と『記憶に残る存在』であることを表出していた。

8) 【仕事が円滑に進む存在】

女性集団の中に男性がいることで、雰囲気は良くなり、『仕事が円滑に進む存在』であると表出していた。

D. 考察

対象者である男性訪問看護師は、困った経験はしていなかった。それは利用者に対する事前の配慮がされていたためである。一方、利用者の思いに配慮したケアの提供ができる体制を男性訪問看護師がいることでとれるため、利用者のニーズに応えられていると考えられる。

生活の場である在宅では、生活の質を高めるために利用者の意思を尊重することが求められている⁴⁾。男性訪問看護師が同性利用者から支持を得ていたり、気持ちを伝えやすい存在であるといった関係性の築きやすさを経験していることから、利用者の意思を尊重するためには、男性看護師のケアが求められるのではないかと考える。

体力面の強さを利用者・スタッフから頼りにされるのは一般病棟を対象にした先行研究と同様の結果であったが⁵⁾、在宅での特徴として、夜間・緊急時の対応などにも男性訪問看護師が期待され、頼りにされてい

ることが明らかになった。

しかし、少数派としての孤立を経験していることから、職場に男性スタッフがいた方が、働きやすい環境になるのではないかと考える。

これらの対象者である男性訪問看護師の経験から、未だ就業者数が少ない現状ではあるが、男性看護師ならではの利点も多いことから、男性看護師が訪問看護ステーションで働くことは、利用者への看護提供の充実にもつながると考えられる。今後、就業者数が増え、働きやすい職場を構築するためにも、医療・福祉の現場で、広く周知してもらうなどの認知度を高める取り組みが必要である。

今回、男性訪問看護師が受け持っている利用者数、男女構成については調査していない。訪問看護ステーションにおいて、男性看護師の適正な人数なども考えていく必要があるため、受け持ち利用者数、男女構成なども調査する必要がある。また、今回は男性訪問看護師の経験を明らかにしたものであり、利用者への調査は行っていない。男性訪問看護師から看護を提供された利用者の視点からの調査も必要である。今回の対象者は10名であり、一般化には限界がある。研究成果の精度を高めるためにも、対象者を増やし、一般化につながるような研究に取り組んでいきたい。

E. 利益相反

利益相反なし

F. 引用文献

- 1) 日本看護協会：平成27年看護関係統計資料集
I. 就業状況 1. 就業者数(4) 看護師, 准看護師(年次別・就業場所別). <https://www.nurse.or.jp/home/statistics/index.html> (アクセス日 2015年4月3日)
- 2) 日本看護協会：平成27年看護関係統計資料集
I. 就業状況 1. 就業者数(5) 保健師, 看護師, 准看護師(男性, 年次別・就業場所別) [再掲]. <https://www.nurse.or.jp/home/statistics/index.html> (アクセス日 2015年4月3日)
- 3) 谷津裕子：研究方法を考えるステップ. Start Up 質的看護研究, 44-48, 学研メディカル秀潤社, 2010.
- 4) 山田雅子：在宅看護の目的と特徴. 在宅看護論, 4-5, 医学書院, 2016.
- 5) 近藤大志, 浅野耕太, 妹尾佳恵, 他：一般病棟における男性看護師の役割—患者への意識調査からの考察—. 第38回日本看護協会論文集 看護総合：115-117, 2007.